



香港便り その33

日

本の山といえば富士山だろう。独立してそびえ立ち、何キロにもわたって尾根が続く姿は壮大で古から日本の象徴となってきたのもうなずける。国土の7割を占める山地だが、日本の山といえば大きく裾野が広がる山をイメージする。連山といわれるものも、何キロにもわたってなだらかに連なる山々を日本人は思い浮かべるのではないだろうか。大きくて偉大な存在を感じることこそが日本人の山岳信仰にもつながっているはずだ。

中国でも山は特別な存在であった。水墨画に見られるように、中国の歴史の中で繰り返し描かれ、儒教や道教の根源的な価値観を支える存在であり続けてきた。ところが水墨画に描かれる山々は細長く尖った崖のような山々が縦方向のベクトルに広がり、どこかアニメーションのようだ。日本的な山とは違った描かれ方に、山が宗教的イメージを備えることで作者にデフォルメされた形なのだろうと今まで思っていた。

「桂林山水甲天下」と宋代の詩人が残した言葉があるのだが、桂林は世界一美しいという意味である。

その言葉を経験すべく、香港から広州経由で高速鉄道を乗り継ぎ、5時間ほど電車で揺られ、広西チワン族自治区桂林市にたどり着くと、そこには絶景が広がっていた。細長く独立した山がポツンポツンと無数にそびえ立ち、その間を河川がうねるように蛇行する姿はまるで夜空に浮かぶ星のようで、人間の想像の範疇を超えるスケールである。水墨画の世界が実際に中国には存在するのだ。

水墨画で山を描いた作品は山水画と呼ばれるが、山と川は常に一緒に描かれ、万年の時を経ても変わらぬ恒久的の存在として、人間社会と対比される。まさに山とは宇宙そのもので中国文化の重要な思想なのである。

最近では愛国教育の一環として、古より愛されてきた風景を愛するということが流行っているようで、桂林には何百という新しいホテルが山の周りに立ち並び、中国全土から観光客が集まっているようだった。新たなバーや、おしゃれなスポットがタケノコのように湧き、「自然の景観を損なうのでは」という危惧もあるが、山と川の恒久的の存在と、ファッショナブルな人間の営みの証という一時的な

存在の対比が山水的でありそれはそれで帳尻が取れているようであった。

香港へ帰る日に、ホテルでチェックアウトを済ませようとするとローカルスタッフが大量のみかんをお裾分けしてくれた。そういえば桂林で会う人々はおおらかで素晴らしい人々ばかりであった。それは神秘的で異次元的な空間の中で暮らすことによって人間のちっぽけさを理解するからこそ、心に余裕ができるのかもしれない。

山と川、天下一の絶景

文 高野 陽年

text by Yonen Takano

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。

